

成人看護学技術演習の現状に関する文献調査

長嶋祐子*・飯塚麻紀*・奥井良子*・近藤浩子*

Current issue of campus practice in adult nursing — A literature review —

Yuko NAGASHIMA*・Maki IITSUKA*・Ryoko OKUI*・Hiroko KONDO*

抄録

目的：看護基礎教育機関で行われている成人看護学技術演習の報告を概観し、現在の傾向を明らかにする。

方法：医中誌 Web 版より、2014年から2018年7月の国内文献の検索を行った。抽出された77件について、発行数の推移を確認した。そのうち、詳細に演習内容が記載された18件を対象に、急性期・慢性期看護ごとに、演習の構成および調査の傾向について記述統計を行い、研究目的と演習目標の類似性に従って演習内容を分類した。

結果：対象文献の研究目的は、シミュレーション教育の評価が急性期、慢性期あわせて7件で、多くを占めていた。演習目標の傾向は、急性期では、術後患者への観察と適切なケアを学ぶ7件で最も多く、慢性期では、患者とのコミュニケーションを学ぶ3件など、患者教育に関するものが多い傾向にあった。

考察：今回の調査では、演習内容を概観することで、シミュレーション教育を主流とした演習の工夫が確認され、効果的な演習計画への示唆を得た。

キーワード：成人看護学，技術演習，急性期，慢性期

I. 緒言

患者のケアの中心を担うとされる看護職は、さまざまな場面で患者の多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が求められる（厚生労働省，2018a）。この能力は、看護基礎教育機関においてその基盤を育くみ、看護師になっても継続して自己研鑽すべき能力である。

2008年改定の第4次看護師3年課程カリキュラムでは、統合分野の追加や、看護基礎教育での技術項目の卒業時到達度の明確化が図られる

と同時に、各分野での教育内容の充実の必要性が示された。その内容は平成26年版の保健師助産師看護師国家試験出題基準の改定時に反映されている（厚生労働省，2013）。

学士課程の卒業時まで求められる看護実践能力を修得させるために、学内演習は重要な要素の一つである（日本学術会議，2017）。中でも臨床を模倣または再現した環境の中で、学生が知識や技術・態度を統合し、経験を通して学ぶことで、臨床判断と看護実践能力を身につけ

*看護学部 看護学科

ることを目的とするシミュレーション教育の実施が推奨されている（厚生労働省，2018b）。

研究者所属大学看護学部成人看護学領域でも、看護実践能力につながる授業の一つとして技術演習を位置づけ、その内容と方法を検討している。先行文献では、林ら（2008）によるカリキュラム改正前を中心とした成人看護学領域の技術演習内容の検討や、中村（2015）の英国の成人看護学演習の紹介もあるが、わが国における近年の調査は見当たらない。そのため、特にカリキュラム変更後に看護基礎教育機関で実施されている成人看護学での技術演習の傾向を明らかにして、考察した上で演習を組み立てることが必須であると考え。そこで本研究は、国内の看護基礎教育機関で行われている成人看護学の技術演習の内容を明らかにすることで、今後の効果的な演習計画について検討することを目的とした。

II. 調査方法

1. 対象文献の抽出

1) 医中誌 Web 版を使用し、過去5年（2014年～2018年8月）の文献検索を行った。検索キーワードは「成人看護学」「演習」を用いた。これらの文献のうち、演習内容の詳細を把握できない会議録は除外した。その結果77件が抽出され、演習内容に関する報告の年次推移を調査するための対象文献とした。なお、CiNii（NII 学術ナビゲータ）においても同条件で検索して確認したが、全て重複しており、対象として追加する文献はなかった。

2) 抽出された77件のうち、技術演習の内容と教授方法の傾向を明らかにするために、具体的内容が記載されている文献を抽出した。そのため、①演習の内容、方法の記載が十分でない実態調査（24件）、②技術到達度に関する文献（10件）、③看護過程や事例展開のみで技術演習の

記載がない文献（9件）、④急性期看護（以下、急性期）と慢性期看護（以下、慢性期）の区別が明示されていない文献（8件）、⑤実習前後の演習を対象にした文献（8件）は、対象外と判断し除外した。その結果18件（急性期10件、慢性期8件）が抽出された。

なお、対象文献を2014年以降と設定した理由は、平成26年版保健師助産師看護師国家試験出題基準の変更により、看護師教育の技術項目と卒業時の到達度および看護の統合と実践が反映されたことを受け、授業内容の見直しを図ったことが予測されるためである。

2. データ分析

1) 演習内容が明らかになるよう独自にデータフォームを作成し、分析対象となった77件について、項目に沿って文献ごとに整理した。分類項目のうち、発行年および文献の種類について記述統計を行った。

2) 次に、演習内容が詳細に記載された分析対象文献18件について、急性期、慢性期ごとの発行年と、演習の構成として、演習時期、演習コマ数、事前学習の内容、技術演習と看護過程事例の関連性の項目について記述統計を行った。なお、演習の構成に含まれる4項目は、授業設計に必要な要素（藤岡，1997）を参考に決定した。

3) 分析対象文献18件で調査された技術演習の傾向として、使用されている事例患者について記述統計を行った。詳細な内容については、研究目的に沿って分類したのち、さらに演習の目標の類似性に従って分類し、文献ごとの演習内容、取り組みの工夫、結果を整理した。

4) データ分析の一連の過程は、成人看護領域の教員4名が行い、適宜、検討会を実施して進めることで、妥当性と信頼性の確保に努めた。

Ⅲ. 結果

1. 文献数の推移

成人看護学の演習に関する77件の年度ごとの内訳は、2018年11件、2017年15件、2016年16件、2015年15件、2014年20件であった。そのうち原著および解説の文献数は、2018年は原著11件、解説0件、2017年は原著13件、解説2件、2016年は原著14件、解説2件、2015年は原著10件、解説5件、2014年は原著17件、解説3件であった(表1)。

2. 演習の構成

分析対象論文18件の内訳は、急性期10件、慢性期8件であり、特に2016年の6件(急性期3件、慢性期3件)と2017年の6件(急性期5件、慢性期1件)で、全文献の3分の2を占めていた(表2)。技術演習の時期は、大学では急性期、慢性期ともに3年前期が多かったが、2年次に行われていたのは急性期3件で、うち1件は2年前期であった(表3)。

事例展開を除く技術演習のコマ数は1～8コ

表1 成人看護学演習に関する文献数の推移
N=77

発行年	総数 (件)	原著 (件)	解説 (件)
2018	11	11	0
2017	15	13	2
2016	16	14	2
2015	15	10	5
2014	20	17	3

表2 成人看護学技術演習に関する文献数の推移
n=18

発行年	総数 (件)	急性期 (件)	慢性期 (件)
2018	2	0	2
2017	6	5	1
2016	6	3	3
2015	1	1	0
2014	3	1	2

表3 技術演習の時期

学年	n=18	
	急性期 (件)	慢性期 (件)
大学2年前期	1	0
大学2年後期	2	0
大学3年前期	4	4
大学3年後期	1	1
専門学校2年後期	1	0
専門学校3年前期	0	1
不明	1(大学3年)	2

表4 技術演習のコマ数

コマ数	n=18	
	急性期 (件)	慢性期 (件)
1	2	1
2	2	2
3	0	2
4	3	0
5	0	1
8	1	0
不明	0	2

マと幅広く実施されていた(表4)。事前学習があることが明記されている文献は急性期5件、慢性期8件であった。そのうち、視聴覚教材を作成、使用するものが急性期、慢性期合わせて3件であった(表5)。看護過程事例と技術演習と関連付けて実施していることについて明記されていたのは、急性期5件、慢性期5件であった(表6)。

3. 技術演習の傾向

1) 演習に使用されている事例

急性期の演習で使用する事例患者は、胃がんの胃切除術前後の患者の観察とケアが7件と多く、直腸がん術後が1件、事例なしが2件であった。慢性期は2型糖尿病のインスリン自己管理導入事例の患者の支援場面が6件で、乳がん抗がん剤治療1件、肺気腫1件、心筋梗塞発症後事例1件であった(表7)。

表5 事前学習の内容

		n=13	
内容		内訳 (件)	総数 (件)
急性期	援助計画	2	5
	事前学習の手順書、構造図作成	1	
	iPad教材の視聴	1	
	DVD視聴とスキルチェックを覚える	1	
慢性期	手技の動画視聴	1	8
	食事療法、運動療法資料や専門雑誌を自由に閲覧	1	
	教科書の内容を指定	1	
	事例の情報整理	1	
	手技チェック表を用いて事前に習得する	1	
	糖尿病患者の特徴、検査、看護について資料を読む	1	
	コミュニケーション技術の復習	1	
50代女性のコミュニケーションをイメージする	1		

* 急性期のうち、事前学習の明記がなかった5件を除く

表6 事例の使用状況

	n=18	
	急性期 (件)	慢性期 (件)
看護過程の事例	5	5
看護過程の事例 +看護過程演習なし紙上事例 または技術演習のみ	1	1
看護過程演習なし紙上事例	2	2
不明	2	0

表7 技術演習で使用されている事例患者

		n=18
内容		件数
急性期	胃がん術前、術直後、1日目	7
	直腸がん患者のストーマ造設	1
	事例なし	2
慢性期	糖尿病のインスリン自己管理	6*
	乳がんの治療	1*
	肺気腫	1
	心筋梗塞発症後	1

* 重複あり

2) 研究目的と演習目標の傾向

分析対象となった18件について、急性期、慢性期ごとに、研究目的に沿って分類し、さらに演習目標の類似性に従って分類した(表8、表9)。

急性期10件の研究目的は、シミュレーション学習評価4件、臨床看護師等協同授業による学習評価3件、患者体験効果1件、評価ツールの作成及び使用後の評価1件、自作教材評価1件に分類された。演習の目標は、術後患者への観察と適切なケアを学ぶ8件、正確な心肺蘇生が実施できる1件、ストーマケアの視点と管理の方法を学ぶ1件に分類された(表8)。慢性期8件の研究目的は、シミュレーション学習評価3件、ロールプレイ学習評価3件、患者体験効

果1件、自作教材評価1件に分類された。演習の目標は、患者とのコミュニケーションを学ぶ3件、患者教育技術を学ぶ2件、患者の苦痛を理解し援助を考える2件、看護技術を習得する1件に分類された(表9)。

3) 演習内容と工夫

①看護技術の習得：技術演習の多くは提示された内容で事前学習を行い、臨床看護師や教員のデモンストレーションのあとに実施されていた。実施の際は事前学習内容に従って看護師または看護学生役で行われるが、単純な技術の実施ではなく、事例の設定場面に合わせて実施するものであった。

表8 急性期の技術演習の研究目的と演習の内容

研究目的	演習目標	演習内容	取り組みの工夫	研究結果	文献
シミュレーション学習評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	60代男性患者で胃がんと術後1日目の観察場面について、シナリオ学習教材を作成した演習を実施している。 学生が2人ペアを作り、メインで観察する学生とサブで観察する学生を決め、その内容を看護師役(教員)に報告する。 1回目は術後1日目の観察場面のシミュレーションを実施する。 2回目は術後合併症(術後出血と無気肺)が発症した設定に対して、観察とその対応のシミュレーションを実施し、看護師役に対する報告をする。ともに30分のデブリーフィングを実施している。	正常な回復と合併症発生の2つの場面で演習が構成されている。患者の状況は事前に学生には伝えず、その場で判断させている。シナリオ学習教材を使用している。	演習前後で以下項目の評価を実施する。 ①実習前の技術の不安：有意差なし ②手術のイメージ：肯定的なイメージへ ③援助規範意識：4項目のうち、自己犠牲規範が優位に向上 ④問題対応行動：問題解決・回避のための患者生活・治療行動代行、症状緩和、生活維持行動の促進と、その個別化、問題解決に向けた相互行為の円滑化、問題解決への事項評価が有意に向上に効果があった。	大植ら(2017)
シミュレーション学習評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	①40代男性で胃がんに罹患し手術目的で入院した事例患者と②事例設定なしの2種類の演習を実施している。 ①事例設定患者は、入院当日(手術前1日)と術後早期(手術後1日目)であり、介入は機械患者と学生間で実施する。模擬患者での実施内容は、術前オリエンテーションの実施と情報収集(2コマ)、学生間での実施内容は、術後の全身状態の観察、離床の援助(2コマ)であった。 ②事例を設定しない演習は酸素療法、吸引法、酸素ボンベの取り扱い、術直後の観察(1コマ)であった。	シミュレーション内容を、事例設定しない演習と事例設定した演習で技術内容に応じた分けて実施していた。どちらもシミュレーターを使用している。	看護過程の自己評価の総点数と教授方法で評価している。演習の平均点で最大を示した項目は「優先順位をつけることができる」であり、最小値は「簡素にだれでもわかるように記載できている」であった。教授方法として平均の最大値は「教員による技術のデモンストレーション：手術直後の観察」であり、最小値は「リスク・倫理的配慮に関する課題レポート」であった。	尾形ら(2017)
正確な心肺蘇生が実施できる	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	B氏女性患者の胃切除術後の生体反応とその観察、および術後患者のアセスメントを実施する場面であった。手術が予定通り終了して1時間経過し、回復室から一般病棟に帰室した時点を場面設定し、シミュレーション(モデル人形)を使用して1グループ(5~6名)10分間観察後、30分間のデブリーフィングを実施していた。	シミュレーター(モデル人形)を使用している。	演習後と臨床実習後に評価をした。観察項目や注重点などを詳しく学べた、実習で体験するとさらに良く理解できると感じた、などがあった。しかし、一度や二度の演習を実習で生かすのは難しいと感じた、実践で役立てられなかったので演習をもっと増やしたいという意見もあった。	及川ら(2017)
臨床看護師等協同授業による学習評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	近隣の消防本部から、医療生体シミュレーターとトレニング用のAEDを借用した。学生の学習効果を高めるために5、6人の学生に対し医療生体シミュレーター1体を配置している。BLSは事前学習を課し、教員も説明の上、BLSを実施している。事前学習課題と合わせて心肺蘇生の演習を振り返り、将来医療職に就くものとして一次救命処置の実施に対する意義を考察させている。	近隣の消防本部からシミュレーターをレンタルしていた。確実に知識を身につけてから技術チェックを実施していた。(知識テストは合格者は合格後に実施可能)	事前課題として学生に手渡したBLSスキルテストシートをもとに演習当日にてBLSの一連の流れに関するテストを行ったこと上の実施は意義があった。	久保田ら(2014)
臨床看護師等協同授業による学習評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	3施設5名の臨床実習指導者と共同で実施する。事前に臨床実習指導者と目標や進め方の打ち合わせを行い、演習の最後にシナリオに基づいたシミュレーションを実施してもらう。演習は術後、帰室後のバイタルサインチェックを場面として設定している。	臨床実習指導者がデモンストレーションを実施していた。臨床実習指導者との共同授業で計画、実施されていた。	患者の状況に合わせた声かけなど、臨床実習指導者によるデモンストレーションは気づきをさらに深める効果があった。臨床での実際の声かけやかかわり方を細かい視点を持つことができていた。	由井ら(2017)

(表8つづき)

研究目的	演習目標	演習内容	取り組みの工夫	研究結果	文献
臨床看護師等協同授業による学習評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	胃切除術後患者を受け持ち患者と想定し、術後1日目の離床への援助を演習テーマとした。演習は、①学生は担当教員や臨床実習指導者に看護計画を報告②観察から寝衣交換や離床へのアセスメントを報告③離床または寝衣交換のいづれかを実施であり、患者役は学生が行った。①90分、②と③90分で実施し、臨床実習指導者も1人1グループ担当し、実施中の助言、実施後の報告まで直接指導を担当していた。	学内演習で臨床実習指導者から直接指導が受けられるよう設定した。	学生は、術後の観察、点滴中の寝衣交換、離床への援助は70%以上が指導を受けたとし、イメージ通りの報告は85%ができてきたと回答している。実習前には疑問が解決し、演習への期待を感じ、実習への動機づけになった。臨床実習指導者は、実習では見えない学内での学生の強みを感じていた。	平井ら(2016)
臨床看護師等協同授業による学習評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	胃がんAさんに対して「術後1日目の看護」を実施する。設定は、輸液ルートと腹腔ドレーン挿入中患者に対して、背部清拭と寝衣交換を実施した後、ベッドサイドにて立位援助の場面であった。ブリーフィングでは、教員が場面設定を説明し、病態と麻酔・手術の知識を確認をしたあと、臨床看護師と教員A、模擬患者でシナリオに沿ってデモンストレーションを実施し、教員Bが各場面の看護のポイントを説明後、シナリオに基づき演習を行った。臨床看護師は臨床経験が豊富な基礎教育経験者で、模擬患者は模擬患者協会のボランティアであった。デモンストレーション後、教員は学生の思考や行為を支援した。	臨床看護師がデモンストレーションを実施した。模擬患者協会のボランティアにより模擬患者のケアを実施した。	点滴をしながらの全身清拭など【多重課題】【初めての技術】【患者への配慮】が難しく、患者の離床を進めるための【患者の個別性に合わせた援助】も難しく、患者の個別性があったが、臨床看護師デモンストレーションという面において利点があった。タイムリーな演習内での説明もわかりやすい説明につながっていた。	森安ら(2016)
患者体験効果	ストーリーマーカーの視点と管理の方法を学ぶ	50代女性、直腸がん、S状結腸ストーマ(単孔式)造設患者の設定で実施している。パウチは排泄物だけを破棄できる下部開放型を使用し、事前学習のS状結腸ストーマの構造図とパウチ交換の手順書を参考に、教員がデモンストレーション後、学生全員がパウチ交換場面の看護師役と患者役を実施する。さらに、学生が自身で腹部にパウチを貼付し、演習後1時間程度、患者として過ごす体験を設定していた。	事例患者のあるロールプレイングによる看護師、患者体験をしていた。臭いや感触について体感できるように味噌やマヨネーズで代用した。	結果は装着型ストーマモデルを用いた患者としての疑似体験は、臨床実習での体験に劣らず、リアリティのある体験であったといえる。パウチ交換手技の習得だけではなく、患者の辛さや困難を理解することにより、看護師として傾聴を主とした精神的支援をしていく必要性を見出していた。	有澤ら(2017)
評価ツールの作成及び使用後の評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	胃がん男性、50代胃全摘術後1日目の設定で、ディスプレイにより看護計画立案後、術後1日目の離床の援助の設定で、ドレーン挿入や尿パップなどの観察、管理を含め、シミュレーション学習が実施された。	パフォーマンスを総合的に評価する。学生の実施場面の動画から評価項目と基準を決定している。	ルーブリック作成、使用により、学生に何を学んでほしいか洗い出しの作業および、ができた。教員が学んでほしい内容について、答えを与えずとも学生に考える機会を与えるツールであった。	金子ら(2016)
自作教材評価	術後患者への観察と適切なケアを学ぶ	教員のデモンストレーション後、学生がグループごとに事前課題の観察項目に沿って観察を実施し、技術試験を受ける。技術項目は①手術直後の看護(総論)、②意識レベルの確認、③疼痛の観察、④呼吸外麻酔の確認、⑤呼吸の観察、⑥酸素流量の確認、⑦循環の観察、⑧術後創傷管理、⑨ドレーン管理、⑩輸液管理、⑪尿量の観察、⑫下肢の観察、⑬弾性ストッキングの管理、⑭腹部の観察、⑮動画であった。	事前学習としてのiPad教材を作成し、活用している。	iPad教材の視聴回数平均2.1回で、イメージがしやすいなど、学生の意見は肯定的であったが視聴環境は課題があった。iPad教材の導入による学生の手術直後の観察技術の向上を期待したが、主眼の把握、胸部の観察のみ評価が向上がなかったものの、明らかな技術の向上には繋がらなかった。	高橋甲ら(2015)

表9 慢性期の技術演習の目的と演習の内容

研究目的	演習目標	演習内容	取り組みの工夫	研究結果	文献
シミュレーション学習評価	患者教育技術を学ぶ	2型糖尿病に罹患し、治療を受けて10年経過した50代男性患者が、教育目的で入院する場面を通じて、情報の中に慢性期患者の困難さや糖尿病に対する認識を表現することで、イメージ化を図る。 演習は看護師役、患者の家族役、栄養士役は学生が演じ、模擬患者は教員が行う。①指導場面の実施時間は8分、②援助を実施しない学生は援助を視聴し、実施後、それぞれの立場からの気づきを記述する時間を2分③終了後に各グループで15分間、気づきを共有し、全体でデブリーフィングを実施している。	患者役は慢性期看護の経験のある教員が行っている。教員は患者教育を受け感じたことを一般市民の感覚や、慢性期疾患特徴である無力感や自信の低下を意識して反応した。	体験後のデブリーフィングで成人教育の指導方法の必要性に気づくことができた。患者の気持ちに寄り添うことができた。しかし、指導に対する難しさはデブリーフィングで引き出せなかった。これは教員のデブリーフィアールとしての力不足があると考えられている。	中川ら (2018)
シミュレーション学習評価	患者とのコミュニケーションを学ぶ	技術演習はグループディスカッション（糖尿病患者の事例の理解）、実施計画（対象理解の目的）の立案後、計画の実施であった。方法はロールプレイ、場面設定は、学生は実施初日、患者は入院2日目、Aさんを知るための行動、観察の実施であった。模擬患者は4名、1名3ベッドを担当し、学生は1グループ6～7人単位で20分ごとにローテーションする。教員は模擬患者1名につき1名担当し、ファシリテーターを行った。模擬患者が参加していない時間も学生間で患者役、看護師役、観察者になって演習していた。	患者像をマニキュアル化せず、シナリオを厳密に準備せず、学生との相互作用の中で生じたその時々々の思いや感情に忠実に応じ、学生はその場の状況で対応するといった方法を取っていた。	模擬患者は緊張感、臨場感には良い効果があり、知識の足りなさなど対人関係への振り返りができていた。学習意欲、満足感、自己効力感の向上にも関係する可能性が高い。しかし、全員が体験できないうと不満につながる。	谷村ら (2016)
患者とのコミュニケーションを学ぶ	患者とのコミュニケーションを学ぶ	慢性疾患を抱える患者 3 事例について、看護学生役・観察者役、患者役のシナリオを教員が作成し、そのシナリオを読み込んで学生同士でロールプレイを実施する。 事例の設定は①高血糖を指摘され初めて糖尿病教育入院となった患者、②再入院で糖尿病教育入院となった患者、③自分なりに糖尿病を管理していたが自ら糖尿病教育を受けると決めて入院した患者であった。 演習は、学生が模擬患者とコミュニケーションを行った後、観察していた学生、模擬患者及び教員間でフィードバックを行う形を取っていた。	初めての教育入院、再入院、自ら糖尿病教育入院を受けると決めた3場面での演習を行っている。	対人関係を発展させる基本的なコミュニケーション技術を体得し、慢性疾患を抱える患者のエンパシーメントプロセスを支えること、積極的傾聴の技術の重要性や自分らしさを大切にすることを学んでいた。 その一方、対人関係の発展に必要な態度の成立、積極的傾聴、初対面の患者と話すこと、自分に自信を持つこと、会話の中で起こった出来事に対処することなどの困難さも感じていた。	船橋ら (2014)
ロールプレイ学習評価	患者教育技術を学ぶ	糖尿病発症時の看護過程演習後、技術演習では事例患者の10年後を想定して実施した。 ①情報収集の場面では患者役、看護学生役のいずれかを全員が体験できるように設定している。ロールプレイの時間は5分とし、ロールプレイ後、役割ごとに、フィードバックの時間と、グループごとに対象とのコミュニケーションについてディスカッションを行っている。(20分程度) ②患者教育場面のロールプレイを行い、フィードバックした。時間は1回10分とし、ロールプレイ後に各役を演じ、気づいたことをフィードバック(15分)した後、教育的支援において重視すべきことについてディスカッションを実施している。(30分)	技術演習は事例患者の10年後を設定すること、長期制限のある生活を継続することの困難さのイメージ化を促進させた。 教育的支援に関するロールプレイを実施している。	学生同士のロールプレイ演習であり、学生が事例患者の10年後を想定して患者体験をすることや、他の学生のロールプレイを観察することで、教育的支援におけるコミュニケーションについて考える機会となっていた。反面、学生のみでは、10年間の療養生活の複雑な様相を再現することの限界もあると考えられている。	高橋奈ら (2016)

(表9つづき)

研究目的	演習目標	演習内容	取り組みの工夫	研究結果	文献
ロールプレイ 学習評価	患者とのコミュニケーションを学ぶ	成人(慢性期)看護学領域を担当する教員が、循環器疾患および呼吸器疾患を有する対象の情報をもとにシナリオを作成した。 ①学生にシナリオを提示し、5-6名の学生で構成したグループワークを交えた講義を行う。 ②グループワークは、担当教員が予め設定したテーマから、グループごとに選出してテーママシによって行う。 ③取り組みんだ成果についてロールプレイを用いた演習形式の発表、を実施している。	入院時から退院前までの患者の経過をイメージして、課題にそって考える事例を作成している。 ロールプレイを発表し、実施を学生間で共有している。	学生自らが慢性期看護に必要な取り組みに気づく機会となっていた。しかし、グループワークに費やす時間および与えられた課題による難易度の違い、学生間の協調性などが学習成果に影響することだとしている。	原田ら (2016)
	患者の苦痛を理解し援助を考える	演習は自己血糖測定であり、3人1組で患者、看護師役のロールプレイを観察者がチェックする。演習後①患者役を通じて感じたことと、②看護師役を通じて感じて事、③自己血糖測定を必要とする患者のセルフケアについて、④看護師として患者に自己血糖測定の指導を行う場合の注意点についての学びはA11枚のレポート提出にしている。	手技の獲得のみでなく、患者の生活での不自由さや困難さを理解を促進するためのロールプレイが行われている。	針を刺すことの恐怖心を軽減する声かけの重要性に気づき、針の扱いや正確な手技を習得することや、合併症予防や面倒くささなど日常生活の理解にもつながっていた。 血糖の見方を説明し記録を促すといった患者の自己管理への継続の援助についても見出された。	伊丹ら (2014)
患者体験効果	患者の苦痛を理解し援助を考える	演習前に慢性閉塞性肺疾患患者についての講義を実施し、その後、2クラスにわかれ、Aクラスはシャトルランをペアで実施し、体験演習評価シート2種(観察者用、体験者用)記載する。観察者用は観察項目、シャトルラン実施、データを比較して考えられること、客観データ(症状など)を記載し、体験者用は呼吸困難の症状、症状が出たときの手指の状態、呼吸が楽になった体勢などを記載する。その後Bクラスは肺気腫事例患者の全体像の記述を行った。その後A、Bクラスが入れ替わり、それぞれ実施する。	シャトルランを利用し呼吸困難感のある患者の自覚症状についての体験する。 その真で肺気腫患者の事例学習する。	深呼吸やゆっくくりの動作が呼吸困難を軽減することと、こまめな休憩の必要性の理解など、患者の立場になって考えられた。 病態の理解につながらず、患者経験から日常生活援助を考えることができていた。	鹿場ら (2017)
自作教材評価	看護技術を習得する	①看護過程の展開事例は、看護診断(NANDA-I)の13領域のアセスメントを行って看護問題を挙げ、看護計画を立案する。援助技術演習として、糖尿病の悪化に伴ってインスリン注射が導入されたことに伴い、看護援助としてSMBGの指導を実施する。 ②看護過程を展開しない事例として、化学療法中の乳がん患者の輸液療法の実施する。	事前課題として、①事例患者のSMBGの準備、算刺、後始末の方法、②の事例患者の輸液のミキシングおよびブラインディング、輸液ポンプの操作方法を課題とし、動画で学習できる視聴環境を整備した。	動画教材のメリットはイメージしやすい、振り返りにも活用できるなどであったが、デメリットとして、見たい部分が全部そろっていない、見ただけで勉強した気分になる、実際はうまくいかない、視聴や操作がスムーズにいかないなどの内容があがっていた。	平賀ら (2017)

②患者体験から対象理解：シミュレーション教育の多くはロールプレイ型の演習であり、患者役は学生の他、教員、模擬患者が行っていたが、術後患者への援助ではシミュレーターを使用する演習もあった。実施後、役割を通じて感じたこと・気になったことをディブリーフィングする、テーマについて検討する、ロールプレイの発表など、体験の共有や振り返りが行われていた。実施体験の共有や振り返り等、看護の視点を豊かにするための作業を演習後に取り入れることによって、看護につながる教育がなされていた。また呼吸困難感やストーマの受容や管理など患者が体験していることのイメージ化につながる教材の工夫と効果を報告する内容もあった。

③臨床看護師との共同授業：臨床看護師と協力体制を組み、演習を共同で実施していたものが急性期で4件あった。臨床看護師の役割は、デモンストレーター、グループに入り込んだ助言者、シナリオ上の看護師役、授業参観者であった。

IV. 考察

1. 成人看護学技術演習（急性期・慢性期）の推移と演習の構成要素の傾向

1) 論文数の推移

成人看護学演習の論文数は、2014年から2018年の年次推移には大きな変化は見られなかったが、急性期、慢性期ともに2016年と2017年に文献数が多く集中していた。シミュレーション教育の定着により教育実践報告が増加した可能性も考えられるが、本調査のみではその理由までは明らかにできない。

2) 演習の構成要素の傾向

急性期と慢性期の演習については、3年次に実施することが多いが、急性期の演習では2年次に実施している報告もあった。演習内容をみ

ると、2年次の演習は紙上事例の提示はなく、手技の習得が主であることから、学年進度を考慮して単純なものから複雑なものへと演習内容を発展させていると推察された。演習のコマ数に関しては、使用している事例数や、場面の設定数が多いとコマ数も増える傾向にあると考えられた。

今回の調査では、事前学習に電子媒体による視聴覚教材を使用した調査がみられたことが特徴の一つであった。これらのツールを演習前に事前学習として使用することにより、知識の活用が求められる場面のイメージ化が可能となり、演習での技術に活かされていた。動画など視聴覚教材による必要な知識の提供は、演習に必要な最低限の知識を学生に手軽に提供できるという面で効率的であると考えられる。しかし、学生は視聴ただけで満足してしまい、結果、求められる達成度よりも技術に関する成果が少ないなど、学習効果の問題があることも否定できない。さらに、導入にあたっては、作動環境やコストの面でも課題が残る。よって、視聴覚教材等や動画の効果的な活用のためには、作動環境などハード面の整備が求められる。そのうえで、学生に対しては、視聴のみにとどめず、視聴しながら実際に手技を確認するような動作やミニテストを課すなど、同時作業を組み入れるなどの工夫をすることで、知識の定着が図られ、学習効果が向上すると考える。

2. 技術演習の項目と方法の傾向

1) 技術項目の傾向

今回の調査では、看護過程や紙上事例を設定した技術演習が多くを占めていた。これは、林ら（2008）の1997年から2007年の成人看護学領域の看護技術演習の文献検討で明らかにした傾向と同様である。しかし、林ら（2008）の文献検討での技術項目は、急性期では、術前訓練と

しての呼吸訓練や呼吸器ケア、包帯交換の正確な手技を求めるタスク型の技術演習が実施されていたが、今回の調査では見当たらなかった。慢性期においても、糖尿病患者を事例患者としている点では林ら（2008）の調査と同様であった。しかし、インスリン自己注射や血糖測定といった手技の正確さ以外にも、患者の気持ちに配慮したコミュニケーションや患者教育が演習の中心的な目的となっていることが特徴であった。つまり、正確な手技の習得だけでなく、その患者に応じた対応を求めるシミュレーション技術演習が増加していると考えられる。

2) 看護実践能力を育むシミュレーション教育

看護実践能力とは「人々・状況を理解する力」「人々中心の看護ケアを実践する力」「看護の質を改善する力」であり、育成には、臨床現場に近いことや、文脈を持った学習環境を創造することに様々なチャレンジが必要とされる（松谷、2010）。そのため、看護基礎教育における演習では、対象を理解することや、対象に適した看護援助を提供するための工夫する力を育むことが求められる。その能力の育成には、シミュレーション教育が効果的である。シミュレーションは経験型学習を基盤としているため、実施中・後で評価するようディブリーフィングが設定される（阿部、2016）。目標に対する修得度について、他者の意見をもらいながら自ら振り返ることにより、より好ましい能力につながっていくものである。評価の視点は、精神・運動領域だけでなく、認知領域や情意領域の視点も同様に目標とすることが望ましい。今回の分析対象では、演習の目標としては、認知、情意、精神・運動領域全てを網羅していないものもあった。しかし、学生がディブリーフィングで演習を振り返ることにより、精神運動領域の視点だけでなく、認知領域、情意領域の視点も網羅できることが確認された。

3) シミュレーション教育の工夫

今回の結果より、最も多くの研究が研究目的としていたのはシミュレーション教育評価であった。方法としては、急性期では、術後の観察技術としてシミュレーターが用いられ、慢性期では、模擬患者によるコミュニケーション演習が多いという特徴があった。ロールプレイの使用は、急性期、慢性期ともにみられた。これらは、急性期、慢性期の相違点というよりも、演習の目標ごとに、何を教材とするかによって生じる相違であると考えられる。患者の心理を考えさせたい場合は、学生自身に患者役を課すことで患者体験が可能となり、観察技術を習得させたい場合は、事例に合わせて生体反応を設定したシミュレーターを使用することで目標を達成できる。そのため、演習の目標によって、シミュレーションの方法を工夫することの重要性が示唆された。

技術演習で目標とするものは、1・2回のシミュレーションだけで身に付くものではなく、何度も練習することが必要であると考えられる。さらに、演習でフルスケールシミュレーション学習をするためには、技術が正確であることが前提であり、その技術なくしてはその場で求められる判断や行動の学習につながらない。また、コミュニケーションや患者教育のためのロールプレイ型のシミュレーションをするためには、学生に看護師役ができる知識がなければ、知識不足を反省させることが目的の演習になってしまうなど、方法の選択には課題も多いのが現状である。限られた授業時間のなかで有意義な学びにつながる演習を行うためには、授業外学習の環境を整え、事前学習、事後学習を含めた演習構成を考える必要性が示唆された。

4) 臨床看護師との協同による演習

臨床看護師と協力体制を組んで演習を実施していく方法は、急性期で4件存在し、役割はデ

モンストレーター、グループに入り込んだ助言者、シナリオ上の看護師役割、授業参観者があった。臨床看護師の参加は、学生に対して役割モデルとしての効果を持つこと以外に、その後の実習に対する双方の理解にもつながっていた。実習前から学生の教育に参画することは学生・臨床看護師双方に十分なメリットがあり、ユニフィケーションに代表されるような教育と臨床の場を行き来できるような環境が望まれる。しかし、付属病院や関連病院を持たない看護基礎教育施設では容易に行うことは困難であることが予測される。まず、研究者所属大学の成人看護学領域でも実習病院との連携を図り、学生の達成目標によって必要な協力体制を求めていく努力が必要である。

今回の調査結果から、成人看護領域の学内演習の現状は、看護過程の演習でアセスメントした患者または、紙上患者へのシミュレーションベースの教育が主流であり、目標によって教材の工夫を行う必要性も確認された。今後、本学における授業計画の際にも参考としたい。

V. 結論

本調査では、看護基礎教育機関で行われている成人看護技術演習の内容について、2014年から2018年7月までの文献を対象に調査し、以下の内容が明らかとなった。

1. 成人看護学演習に関する原著および解説の文献数は77件であった。そのうち、技術演習の詳細な方法が記載された文献は18件で、急性期10件、慢性期8件であった。技術演習の時期は、大学では急性期、慢性期ともに3年前期が最も多かった。
2. 技術演習の傾向は、急性期の事例は胃がんで胃切除術前後の患者の観察とケアが7件と多く、慢性期は2型糖尿病インスリン導入の支援場面が6件で、その他、乳がん治療、肺気腫、

心筋梗塞発症後事例があった。

3. 研究目的は、シミュレーション学習評価が多く、演習の目標は、術後患者への観察と適切なケアを学ぶことやコミュニケーションを学ぶことが多い傾向にあった。演習の目標に合わせて教材が選択されており、主に看護過程の演習でアセスメントした事例患者や紙上患者を用いたシミュレーションベースの教育方法が用いられていた。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 阿部幸恵 (2016) : 医療におけるシミュレーション教育, 日集中医誌, 23巻1号, 13-20.
- 有澤舞, 立石和子, 太田美帆他 (2017) : 装着型ストーマモデルを用いた体験的演習による学生の学び, 成人看護学演習レポートの分析, 東京家政大学研究紀要, 57巻2号, 35-41.
- 馬場才悟, 森雄太, 末永陽子他 (2017) : アクティブ・ラーニングとしてシャトルランを用いた呼吸器疾患患者の看護演習の学習効果, 看護人材育成14巻2号, 107-111.
- 藤岡完治 (1997) : 看護教員のための授業設計ワークブック, 医学書院, 東京.
- 船橋眞子, 黒田寿美恵, 中垣和子他 (2014) : セルフマネジメントが必要な成人期の慢性疾患を抱える模擬患者とのコミュニケーションにおいて学生が感じた難しさと学び, 人間と科学, 県立広島大学保健福祉学部誌, 14巻1号, 101-114.
- 原田江梨子, 安森由美, 藤永新子 (2016) : 成人 (慢性期) 看護学領域の授業にロールプレイを取り入れた学習効果, 日本看護学会論文集, 看護教育, 46号, 59-62.
- 林美奈子, 竹内久美子, 伊藤ももこ他 (2008) : 成

- 人看護学領域における看護技術教育の検討, 過去10年間の成人看護学演習の動向から, 目白大学健康科学研究, 1号, 129-138.
- 平賀元美, 中本明世, 山中政子 (2017): 看護技術演習に導入した視聴覚教材に対する学生の活用状況と認識, 千里金蘭大学紀要, 14号, 95-105.
- 平井純子, 吉越洋枝, 前山直美 (2016): 基礎教育と実習施設との連携による教育効果 (第2報), 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 3号, 35-42.
- 伊丹古都絵, 中尾美幸, 住吉和子 (2014): 成人看護学援助論 (慢性期) における演習での学び, 自己血糖測定演習後の記述分析, インターナショナル Nursing Care Research, 13巻4号, 205-211.
- 梶田叡一 (1983): 教育評価, 有斐閣双書, 東京.
- 金子佳世, 水戸部優太 (2016): 成人急性期看護学演習におけるルーブリック活用例の実際, 看護人材育成, 13巻5号, 56-60.
- 厚生労働省 (2013): 保健師助産師看護師国家試験出題基準, 平成26年版の改定概要について, <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002ylby-tt/2r9852000002yldf.pdf>, 閲覧日2018年10月15日
- 厚生労働省 (2018a): 第1回看護基礎教育検討会(資料2) 看護基礎教育を取り巻く現状について, <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000203413.pdf>, 閲覧日2018年10月15日
- 厚生労働省 (2018b): 第1回看護基礎教育検討会(資料4) 看護師養成所における教育内容と方法に係る調査結果, <https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000203416.pdf>, 閲覧日2018年10月15日
- 久保田千景, 今村恭子, 大納庸子 (2014): 看護学科生への成人看護学演習における一次救命処置法の授業展開に対する検討, 園田学園女子大学論文集, 48号, 77-93.
- 松谷美和子, 三浦友理子, 平林優子他 (2010): 看護実践能力: 概念, 構造, および評価, 聖路加看護学会誌, 14巻2号, 18-28.
- 森安朋子, 利木佐起子, 趙崇来他 (2016): 臨床看護師・模擬患者との協同によるシミュレーション教育を取り入れた学内演習の効果, 術後1日目の看護, 保健医療技術学部論集, 10号, 63-72.
- 中川しのぶ, 下村ゆうき (2018): 慢性期成人患者の指導教育におけるシミュレーション学習の効果, 日本看護学会論文集, 看護教育, 48号, 11-14.
- 中村裕美 (2015): 英国 Plymouth University の看護基礎教育における成人看護学演習の現状, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 10 (1), 183-187.
- 日本学術会議 (2017): 大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準, 看護学分野, <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h170929-9.pdf>, 閲覧日2018年10月20日
- 尾形裕子, 岩坂信子 (2017): 看護基礎教育における周手術期の看護過程にシミュレーション演習を取り入れた効果の検討, 北海道文教大学研究紀要, 41号, 109-118.
- 及川紳代, 安藤里恵, 遠藤良仁他 (2017): 成人看護学領域における術後看護のシミュレーション演習の課題の検討, 岩手県立大学看護学部紀要19巻, 17-32.
- 大植崇, 和田知世, 廣田真里他 (2017): 成人看護領域における看護学生のシミュレーション教育効果の検証, 兵庫大学論集, 22号, 27-37.
- 高橋甲枝, 相野さところ, 村山由起他 (2014): 『手術直後の観察技術演習』にiPad教材を導入した教育効果, 西南女学院大学紀要, 19巻,

7-14.

高橋奈津子, 高田幸江, 松本文奈 (2016) : 成人看護学 (慢性期実践方法) におけるシミュレーション教育の取り組み, 聖路加国際大学紀要 2 卷, 68-71.

谷村千華, 西尾育子, 野口佳美他 (2016) : 「対象理解」を学習目標とした模擬患者参加型教育の効果, 米子医学雑誌, 67卷3-5号, 56-64.

由井志穂, 須田雅美 (2017) : 成人看護学演習において臨床と共同授業を行うことでの学習効果, 術後の早期離床に向けた援助, 神奈川県立よこはま看護専門学校紀要 9 号, 9-12.

